

9月28日（日）サムエル記第一2章8節後半～10節

「まことに、地の柱は主のもの。その上に主は世界を据えられました。」

8節の「地の柱」が何を意味しているかは、よく分かりません。いずれにいたしましても、ここでは主が天地万物の創造主であり、地のすべてを支えておられるお方であり、それゆえに、世界における地のすべてのものは主のものであることが強調されています。もしかすると、なぜこのようなことが、突然ここに出て来るのだろうかと思議に思うかもしれませんが、このことが実はとても重要なのです。なぜかと申しますと、世界のすべてを支配しておられる方である主だからこそ、人の人生を逆転させたり、社会的な立場を逆転させたり、6節にありますように「主は殺し、また生かします。」と、人の命までも支配し、「よみに下し、また引き上げます」と、人の死後にまでその支配を及ぼすことができるからです。さらに、10節の最後に、「主は地の果てから果てまでさばかれます。」と言われていて、天地万物の創造主は、さばきを行われるお方であることが記されています。例えば、9節の「敬虔な者たち」と「悪者ども」が、対照的に描かれていて、「足を守られる」と「闇の中に滅び失せる」と、それぞれの人々の最後が記されていますが、それも主のさばきの結果であり、「はむかう者を打ち砕き」というのも主のさばきです。それゆえに地の果てから果てまで、すべての者をさばかれる主を人は恐れなければならないのです。

9月29日（月）サムエル記第一2章10節後半

「主が、ご自分の王に力を与え、主に油注がれた者の角を高く上げてくださいますように。」

この部分は、ハンナの物語とは時代的にも内容的にも合致しないと言われていますが、むしろイスラエルに王政がなされる前に、イスラエルに立てられる王について神の霊によって預言され、祈りがささげられたと考えることができます。

イスラエルの王は、任職のために「主に油注がれた者」であり、まさに神に代って地を治める者となります。その王に神が力を与えられることを願います。そして角を高く上げてくださいますようにとは、主によって力を増し加えられ、強さが備わることを意味しています。イスラエルの王として国を治めるということは、神の召しと神の助けによってなされなければならないことが他の国とは違うところです。カナンの地においても、他国で王政を行っているところはあったはずですが、しかし、それらの王たちは、自分たちの力を誇り、軍事力によって他国をどのように占領するか、戦いに勝利するかということを考えていました。しかし、イスラエルの王は、主によって立てられ、主から与えられる力により、また主が角を高く上げてくださることによって勝利していくのです。そして、イスラエルの王には、主が力を与えてくださるような歩みをしているかが求められています。主の御声を常に聞き、主に忠実に従い、主のみこころを行って歩む時に、主は王に力を与え、

角を高く上げられます。私たちも、自分の召しに忠実に歩み、主が力を与え、角を高く上げてくださるような歩みをし、主が信仰による勝利を与えてくださることを願いつつ、主だけを誇って歩ませていただきたいと思わされます。

9月30日（火）サムエル記第一2章12～17節

「このように、子孫たちの罪は。主の前で非常に大きかった。この人たちは主へのささげ物を侮ったのである。」

12節で「エリの息子たちはよこしまな者たちで、主を知らなかった」とありますが、それを13節では祭司の定めの方から語ります。祭司は、相続地を割り当てられていませんでしたが、特権として民の献げる十分の一が与えられることや、いけにえの中から祭司に分け前として与えられる動物の部位が定められていました。それは、牛や羊の肩と両頬と胃の部分でした。(申命記18章3節)しかし、祭司の子弟たちは、祭司が受け取ることができると定められている以外の部位も三叉の肉座しによって取り上げ、それを自分たちの物としていたと思われれます。また16節で、人が「まず脂肪をすっかり焼いて、好きなだけお取りください。」と言ったのは当然のことで、レビ記3章3～5節を見ますと、脂肪は「主への食物のささげ物、芳ばしい香である。」と言われているからです。つまり、主へのささげ物をまず献げて、その後好きなだけ取りなさいと言っているのです。しかし、祭司の子弟たちは、脂肪が焼かれる前に自分たちの分け前を要求し、拒めば力尽くまで奪い取ろうとしました。まさに、ここに記されていることは、すべて主へのささげ物を侮る行為であり、子弟たちの罪は、主の前で非常に大きかったと言われる理由です。まさに、彼らの姿こそが主を知らないことをそのまま現していると言えます。

私たちがもし主を知らない者であれば、それは私たちの信仰生活に必ず現れます。例えば、私たちは、どのような思いをもって、ささげ物をしているのでしょうか。ささげ物がないがしろにはなっていないのでしょうか。そこに私たちの罪の姿と、主へのささげ物を侮り、主のものを平気で盗む私たちの姿があります。それは、本当の意味で主を知らず、それゆえに主を侮ることになります。そのような私たちは主の目には結局祭司の子弟たちと同じことをしているのであり、彼らのことを笑うことはできないのです。

10月1日（水）サムエル記第一2章18節

「さてサムエルは、亜麻布のエポデを身にまとった幼いしもべとして、主の前に仕えていた。」

祭司の子弟たちとは対照的に、サムエルは「亜麻布のエポデを身にまとった幼いしもべとして、主の前に仕えていた」とあります。亜麻布のエポデは、祭司が身に着ける装束で、出エジプト記3

9章において詳細に記されています。ここで私たちは、幼子サムエルを通していくつかのことを教えられます。まず一つが、サムエルは決して周りの祭司の子弟たちに影響されることはありませんでした。私たちは、クリスチャンホームの子弟たちの信仰の戦いのことをよく知っていますし、実際にクリスチャンの親のもとで育つことで、さまざまな戦いを経験された方もおられるでしょう。そして、私たちは、クリスチャンホームの子どもたちが未信者の友人たちの悪い影響を受けるのではないか、そのような中で信仰から離れてしまうのではないかと心配することがあります。しかし、よこしまな者たちで、主を知らなかった祭司の子弟たちの中にあっても、幼いころから主に仕えていたサムエルの姿は、環境が必ずしも信仰に影響を与えるものではないことを証ししています。二つ目が、「幼いしもべ」ということです。サムエルは、幼いしもべとして主に仕えていました。私たちは、まだ幼い子どもたちをどのように見ているでしょうか。何かするには幼すぎるとか、なかなかじっとしていなかったり、騒いで周りに迷惑をかける存在だなどと思っははいないでしょうか。サムエルは幼いときから主のしもべでした。つまり、幼いときから、人は主のしもべとして歩みうるといことです。そのように、クリスチャンの親や教会が、幼子たちを主のしもべとなるように祈りつつ、育てているでしょうか。そして、幼いしもべであったサムエルは、主の前に仕える存在でした。信仰継承の難しさが叫ばれる昨今ではありますが、サムエルの姿は、私たちに大いに希望を与えます。教会から幼いしもべとして主の御前に仕える者が起こされますよう祈りましょう。

10月2日（木）サムエル記第一2章19～21節

「少年サムエルは主のみもとで成長した。」

ハンナとエルカナは、忠実に年ごとのいけにえを献げにシロに上って行きましたが、その時にハンナはサムエルのために上着を作り、それを持って行きました。もちろん聖書には書かれていませんが、ハンナとエルカナは、息子サムエルのために祈っていたでしょうし、サムエルのために上着を作って毎年持つて行くハンナの姿に、彼女の愛を感じます。クリスチャンの親である一人一人が、自分たちに与えられた我が子に、どのようなかたちで愛を現すことができるでしょうか。また教会員の一人一人が、教会に集っている子どもたちのために祈り、神の愛を現しているでしょうか。そして、主が与えてくださっている幼子たちが、少年サムエルのように主のみもとで体だけではなく、霊的にも成長していくように祈りましょう。

エリは、エルカナとハンナを祝福します。その祝福とは、主にゆだねられた子、すなわちサムエルの代りとして、主がハンナによって子孫を与えてくださるようということでした。そして、エリが祝福したとおりに、主はハンナを顧みて、三人の息子と二人の娘を与えられました。不妊の中で、悩み、苦しんでいたのがうそのように、神の祝福の実としての子が与えられました。もちろん、何かをささげた代わりに、神はそれにまさる別のものを与えて必ず祝福してくださるわけではあり

ません。私たちの神に対する信仰は、神と取り引きをする手段ではないからです。しかし、主は、みこころにより、私たちの信仰を喜ばれることによって、私たちを大いに祝福してくださることはあるでしょう。そのことをハンナは私たちに証ししています。つまり、自分に与えられたサムエルを完全に主にゆだねたことは、主のみこころにかない、それを主は本当に喜ばれたのです。このハンナの姿を通して一つ教えられますことは、私たちが、もし祝福されることを願うなら、祝福されるような歩みをすべきだということです。実際に、主は私たちを祝福することを常に願われ、喜んで人を大いに祝福してくださる神だからです。

10月3日（金）サムエル記第一2章22節

「さて、エリはたいへん年を取っていたが、息子たちがイスラエル全体に行っていることの一部始終を、それに彼らが会見の天幕の入り口で仕えている女たちと寝ていることを聞いた。」

「エリはたいへん年を取っていたが」とありますように、人は誰しも年を取り、体力や気力がだんだんとなくなってまいります。身体機能が衰え、これまでできていなかったことができなくなったり、認識があやしくなったり、判断力が鈍ったりすることもあるでしょう。そのような中で、いつまで主に仕えることができるのかを意識しながら、自分にできる限りのことをしながら、主に仕えることができれば幸いではないかと思わされます。教会にも若い人たちが育ち、健全なかたちでの教会リーダーや役員との交代がなされることを願っています。代る人がいないことを理由に、年配者がいつまでも役員を続けることがないように、常に世代交代ができる教会形成がなされなければならないことを思わされます。

エリは、自分の息子たちの悪いうわさを聞きます。それに対してエリは、悪行を行う息子たちに適切に諭し、戒めようとしています。私たちが年を取り、身体的に衰えていくのは仕方ないと思いますが、霊的に決して年を取ってはなりません。罪に対して鈍くなり、何も感じないほど無感覚になってしまったり、自分の身近な若い人たちが、どんな生活をしていても、それに対して適切に教え、諭すことができないほど、霊的な老人になってしまってはならないのです。もしかすると肉体的には若くても、霊的には年寄りという人がおられるかもしれませんが、そのようなことがないようにしなければなりません。霊的に年寄りにならないために必要なことは、常にみことをばを讀んで祈ることで、主と交わり続けることです。その時に、主ご自身が必ず私たちを霊的に刷新してくださり、信仰を常に若く保ってくださいます。

10月4日（土）サムエル記第一2章23～25節

「しかし、彼らは父の言うことを聞こうとしなかった。彼らを殺すことが主のみこころだったからである。」

23, 24節で、エリは息子たちに対して警告を与えながら、諭します。しかし、25節には「彼らは父の言うことを聞こうとしなかった。」とあります。その理由として、「彼らを殺すことが主のみこころだったからである。」と述べられています。つまり、主ご自身は人に対する生殺与奪の権利を持っているということです。私たちは、生きているのではなく、生きる意味と目的をもって主に生かされているのです。ですから、人は神を恐れなければなりません。主は侮るべきお方ではないからです。「人が人に罪を犯すなら、神がその仲裁をしてくださる」と言います。つまり、神が人と人との間を正しくさばいてくださり、時には悔い改めて赦しを請うなら、その人が赦さなくても、すべてをご存じの主が知っておられて、その人を弁護してくださいます。その一方で、「主に対して人が罪を犯すなら、だれがその人のために仲裁に立つだろう」と言います。結局誰も立てないと言おうとしているのですが、どうしてかと言いますと、主は聖であり、義なるお方ですから、主の御前に自分の正しさや人の側の正しさを主張できる人は誰もいないということです。また、すべての人が主の御前に罪を犯している罪人なので、すべての人が主の御前にさばかれるべき存在なのであって、そのような人が他人のために仲裁に立つことなどできません。そのような絶望的な状況のすべての人に対して、神の側から仲介者を備えてくださいました。それがイエスキリストです。テモテへの手紙第一2章5節「神は唯一です。神と人との間の仲介者も唯一であり、それは人としてのキリストイエスです。」とあるとおりです。イエスは、罪のない聖い神の御子ですが、このお方が、今も神と私たちの間の唯一の仲介者となってくださっています。そのことのゆえに、主に心から感謝をし、まことの神がまことの人としてこの地上に来てくださったイエス様のゆえに心から感謝をいたしましょう。